

国語科（高2現代文）の取組

12月13日（金）～12月18日（水）

対象生徒 高校2年生 7クラス 計225名
（うち1組は20名）

現代文

「夏目漱石『こころ』について考えてみよう」

なお、小論文作成に先駆けて、『こころ』読解の授業を10時間実施している。

また、高2—1組ではさらに小論文作成に先駆けて、グループごとに①「K」と「私」の人物像、②「K」が自殺した理由、③なぜタイトルが『こころ』なのかについて討議し、まとめた。

【仮説】

国語科では「自らの考えや意見を述べる活動を通して、根拠を明確にして発表する力を育てる。作文やレポート、小論文の作成を通じて、目的や課題に応じて情報を収集、分析し、論理的な文章を構成する力や自らの考えを効果的に表現する力を身につける」ことを目標としている。高校2年生では、教材を問題意識を持って読み取り、そこから考えた自分の意見を明確に表現することを目標としている。そこで、定番教材である夏目漱石の小説『こころ』を学んだ後、作品の中にあるテーマを読み取り、それに対する問題意識と自分の考えを明確にし、小論文として表現することを目指した。

【研究内容・方法】

- ・『こころ』を読んで各自問題に感じた点をテーマに自分の考えを小論文にまとめる。
- ・単なる感想ではなく、本文に根拠を求めて、客観的に述べることを心がける。



【評価】

生徒の感想（生徒小論文）

テーマ

○「K」が自殺しないために「私」はどう行動すべきだったか。

Kが自殺しないために、「私」はどう行動すべきだったか。これを考えるためには「なぜKは自殺したのか」ということを考えなければならない。私は、Kが自殺したのは、お嬢さんに失恋したからではないと思う。もし、仮に「私」がKの恋を利己心ではなく良心に従うがままに応援したとしよう。Kははっきりお嬢さんにその思いを伝えるだろうか。いや、伝えなかったはずだ。作中で書かれていたように、Kは「お嬢さんに告白をして結ばれるにはどうすべきか」ということでなく、「この恋を進めるべきか引くべきか」という点で悩んでいた。つまり、Kは己の信じる道を貫くか、貫けるのか、という点で悩んでいたのだと思う。結局は、お嬢さんに対する恋なんてものは、Kにとって道にある大きな誘惑だったと思う。恐らく「私」がKを狡猾にだまそうとせずとも、Kは恋に悩む己の弱さ薄志弱行な様に絶望し、自殺していたと思う。要するに、Kの自殺の理由は、遺書にも書かれていたように、己に絶望したからであり、お嬢さんに対してはあまり多くのことを感じてなかったのだと思う。遺書にお嬢さんの名を書かなかったのは、Kの普通の人間の持つ思いやりだったのだろう。

このことを加味すると、「私」はKにもっと今まで歩いてきた「道」を行かせるように自らの利己心ではなくて、良心に従って強く言ってやるべきだったのだと思う。今回はKをあえて追い詰めるように言葉を投げかけたりしてしまった。本文にあるように、Kは自分の矛盾をひどく非難される場合には決して平気でいられなかった。だから、今回は失敗したんだと思う。「私」が厳しくもあり、思いやりのある優しい言葉をかけてあげれば、Kは今までどおり道を行けたかも知れない。

○嫉妬心と人間関係

「私」とKはお嬢さんという一人の女性を通して三角関係になってしまった。もともとお嬢さんへの気持ちがそれほど強くなかった「私」だが、どうしてこのような関係になってしまったのか。一つの理由としては「嫉妬心」が挙げられる。嫉妬とは自分と相手、そしてその間に挟まれる人物がいて生まれるものだ。そしてそれはある人物を愛しく想えば思うほど、ライバルとなる相手のことを憎くさせる。人間関係に重きを置く「私」にとって、嫉妬心というのは避けては通れない道だったのであろう。心から愛しているとまではいかなくとも、想い人が誰かにとられると思うと邪魔をしたくなるのは、人間の心理として仕方のないことだ。しかし私は、嫉妬心というのは、愛憎お生むだけのものではなくて、それを持つ本人を高めてくれるものだと考えている。つまり、相手に負けたくないという気持ちが自分磨きにつながるということだ。しかし作中の「私」はKの邪魔をするばかりで、自分を高めることは何一つしていない。お嬢さんに自分のことを好きになってもらうための努力ではなく、Kにお嬢さんを諦めさせるための努力ばかりである。この努力を私は肯定できない。これは、ポジティブ（プラス）の努力ではなく、ネガティブ（マイナス）の努力であるからだ。前者は自分も相手も奮い立たせることができ、正々堂々とした真っ向勝負ができる。しかし、後者は相手を目的から遠ざけるためのもので、自分のことはほったらかしである。つまり「私」はKの気持ちをお嬢さんから離すことで自分がお嬢さんに近づいたと思っているのだ。実質、「私」とお嬢さんの距離は変わってはいないのに、リードしていると考えるのは、大きな勘違いだ。しかし「私」のこの考え方を生んだのは叔父との一件があったからではないか。そのことで人間不信になった「私」は目的であるお嬢さんに自ら近づくことに恐れを感じたのではないかと私は考える。距離があればあるほど裏切られたときのショックは軽い。心を開けないまま、嫉妬にむしばまれると、勝負に勝った後も悶々とした気持ちが残るのではないかと考えさせられた。

【授業者の評価】

小説『こころ』のうち、教科書の本文として掲載されているのは、下「先生と遺書」の後半部分である。本文は「私 (=先生)」の遺書の中身であるため、「私」の視点から、友人 K との三角関係、そして K の自殺に至る経緯が描かれている。そのため、K の心情をどう読み取るかによって本文の印象も大きく変わる。生徒の多くがこの点に興味を感じ、問題意識を持っていたようだ。実際、生徒の約半数が「K の自殺の理由」をテーマとして取り上げていた。また、タイトルにある「こころ」を作者の意図したテーマと捉え、「人の心」について考えた生徒も多かった。

日頃、自分の考えを明確に述べることを苦手とする生徒は多いが、小説の読解を通して、本文に根拠を求め論理的に述べたり、「私」や「K」という登場人物に自分自身を照らし合わせて、具体的に考えたりすることができていた。

全体を通して、生徒は意欲的に小論文の作成に取り組んでいた。小説の理解が、各自の考えを深める一助となったようだ。テーマに関しても自分のこととして捉えることができていた。よって、「自らの考えや意見を述べる活動」を通して「表現する力」については、向上したと言える。